

俳
句
集

し
ら
か
ば

三
木
今
朝
雄
著

著者略歴

三木今朝雄（みきけさお）

群馬県多野郡吉井町に生まれる

旧運輸省東京鉄道局高崎鉄道管理局勤務を経て

吉井町中央公民館長、同郷土資料館長、同文化財調査委員、

郷土資料館運営審議会委員等を歴任

半世紀にわたり郷土史および文化財の研究中

短歌および俳句、川柳をこよなく愛する

発刊の記録

第一集短歌集「山茶花」平成十二年春

第二集川柳集「ほんとのほんと」平成十三年夏

第三集が当俳句集であります

はじめに

俳句集「しらかば」は昭和五十二年以来、三十数年にわたり、私の日常生活のなかで、おりにふれときにふれて詠んできた作品のうちの一部を集めたものです。

文字どおり稚拙なものばかりですが、私といたしましては一句ごとに丹精こめて作ったものです。ご笑覧願えれば幸甚です。

平成二十年一月

三木今朝雄

鶯の初音に目覚む朝未だき

新緑の影やはらかに蟻の列

葉ざくらの下をえらびて昼^{ひる}餉^げとす

野佛の顔さはやかに梅雨明る

初蛩いたはるやうに籠に入れ

あかしやの夜目にも白く月あがる

夏まつり婦人みこしがはばきかせ

風鈴を音色で選び求めけり

台風のニュース気になる出穂まじか

野佛の寒そうにして初の霜

散髪の襟もと涼し秋の風

薯^{いも}掘りにはしやぐ園児声はづむ

御社^{みやしろ}の屋根葺替て秋祭り

スーパ―も月見だんごに芒^{すすき}そえ

参道に雪洞^{ほんほり}ゆれて十夜かな

野兔の見えかくれする枯野かな

干柿の暖簾^{のれん}つらなる山家かな

日溜りに柿剥く婆の背丸め

喜多方は倉にトチ餅酒の良さ

落葉焚く僧に会釈し寺を辞す

福島

麦圧みのしばし足止む雉子の声

年忘れ意外な人のかくし芸

酉の市熊手の列のつづきけり

ひとり去り又一人きて落葉焚き

鳥追いの大鼓がゆさぶる山の町

中之条

瀧氷柱の奥に毅然と不動尊

冬の雲大寺の上をよぎりけり

年迎う三日坊主の日記買う

寒明や雀の声のはしやげり

寒もどり老の引風長びけり

野佛に笠のせる子や春の雪

亡き父に酒を手向る彼岸かな

国東に春の光や磨崖佛

はらはらと音するように桜散り

休耕の田に芹摘みの集りぬ

九州

おぼろ月我が上にあり露天風呂

溪流に岩魚の影やつつじ燃ゆ

日の入を待ちて吹止む春嵐

未だ明けぬ地面に唄う雲雀かな

盃に月影おちる花見かな

田水見てもどる岸辺の螢かな

風鈴の音さわやかに梅雨明る

梔くちなし子の花にたわむる揚羽蝶

蛙まで日陰をえらぶ大暑かな

梅雨明けの青田かすめて燕とぶ

紫陽花の寺に披ひこう講の澄みし声

台風のそれで出番の案山かし子かな

火祭りもすぎで秋めく山の里

遠蝉や読経もれくる山の寺

秩父路を同行二人秋時雨

上棟の木の香かんばし秋日和

秋耕や蛙ねぐらを追はれけり

冬雲を映す川辺や鴨あそぶ

冬月や秩父まつりの鉾進む

山茶花の紅に溶けあう初の雪

寒鮓の銀鱗おどる師走かな

銃声に雉の安否や冬の朝

禅寺の読経もれくる初不動

霜柱ふみて寄りくる豆剣士

軒にきて我に餌乞う寒雀

和裁娘の声はしやがり針供養

建国の日さえ国旗の忘れられ

習字する部屋に梅の香道みちざね真忌

春浅し曾々木海岸波の花

梅祭り句会の人等着ぶくれて

陽炎のむこうに浅間山炎える

清明の燕古巢に戻りけり

霊場に幟のぼり一流灌仏会

朧おぼろ月カラオケはづむ梅の寺

尼寺のしぼりの牡丹風にゆる

畑打ちの麦藁むぎわら帽子ふりむかず

代掻しろかきの田にかかるがもの戯むれて

蓮咲くや心経写す手にゆとり

行く夏を惜む踊りの大鼓かな

ひかえめに短かき夏の蝉の声

打球のび見上げる空の翳雲

中秋の妻籠泊まりやそばだんご

妻
籠

満月は寺の上なる十夜かな

浅間やけしのぶ観音萩の花

山鳩も風邪声らしき冬至かな

お地蔵の重ね頭巾ずきんや初雪す

針供養娘らつつましく並びをり

春雨や和銅遺跡の梅薫る

寒桜咲くを待ちかね目白くる

寒暖のこもごも来り桜散る

郭公のけだるき声や夏至となる

梅雨寒に耐ゆる花色濃あじさゐ

雲の峰青田に鷺さぎの憩いをり

老妻の夏蚕なつごをすませカラオケに

小山田に早稲わせ刈る鎌の音冴える

つらなりて竿灯のごとからす瓜

読札の声さはやかに梅の寺

駅までの道により沿う春の川

早苗田をかすめ燕の親子かな

五月晴孫の祝の武具飾る

郭公の声にラヂオの音しぼる

天の川茅^ちの輪くぐりの人の列

原爆忌昨日のごとし蝉しぐれ

野菊咲くほとり羅漢のおどけ顔

しばらくは大根の列つづく村

早咲きの梅に出店はまだ二軒

啓蟄や雀の声も活気満ち

うち揃い休耕田の草焼けり

紫陽花の花よりのぞく雨蛙

小山田もみな植え終へて半夏かな

更くるほどはやしたつるや田の蛙

吟行も酒宴にかはる梅見ごろ

大菩薩峠こえくる春嵐

花見ごろ高祖をしのぶ身延山

身延山

日向水手にたしかめて足洗う

鶯も音痴のごとし夏に入る

奥入瀬の緑映して行く流れ

青森

雨蛙我にももの乞うように鳴き

長梅雨や通院の道足おもし

立秋や味噌と生姜の手酌酒

水澄むや天守の影に鯉寄りぬ

松本城

麗らかや夫婦で祝う屠蘇の味

冬立つや竿灯のごと烏瓜

寒最中さなか日ごと色ずく沈丁花

振袖の射手ならびけり弓始め

春浅し芹摘む婆の頬かむり

北窓を開きいつきに春を入れ

たそがれて畦火の色の濃くなりぬ

代掻きの後に鳴きだす蛙かな

暑さにも季節たがえぬ赤とんぼ

御社に柏手ひびき年明る

朝風呂に妻のくつろぐ小正月

シンホニ―雑木林の芽吹かな

施餓鬼会の香煙すがし弥陀の顔

芹摘みの四五人居りて賑々し

新緑を映しておつる瀑布かな

緑陰にしばし憩える七味売り

小山田もみな植え終えて半夏生

芝刈機を止めて蚯蚓みみずを守りけり

艶やかに嵯峨菊香る前に佇つ

兩岸の紅葉まぶしき舟下り

軒ごとに吊るす干柿多胡の里

夜もすがら恵方詣りの人の列

まゆ玉もまばらになりぬどんど焼

満開の梅に無常な春の雪

冬月や秩父まつりの鉾すすむ

役すみし案山子は納屋に寝かされる

豊作を喜ぶごとくコンバイン

雪深し囲いし芋の見当らず

和洋裁まざりて祭る針供養

減反を知るやしらずや蛙鳴く

青蛙植田に声を競い合う

ジヨキングの人等足止む彼岸花

蛙刈りの先にかまきり蟪蛄我迎う

諸掘つて釣つる瓶おとしの路急ぐ

登校の子等走りゆく息白し

蝉の声あの日とおなじ終戦忌

耕しの間を得てやおら一服す

暖冬の予報うらはら寒きびし

村人のあらかた集いどんど焼き

秋風や女工哀史の墓に佇つ

竜光寺

蝉しぐれ読経のごとし原爆忌

落^{らく}慶^{けい}の観音堂に風光る

啓蟄のみみずとまどう春の雪

風鈴の音色も加え蝉しぐれ

小春日や毛野の山なみ紺碧に

残されし熟柿ずくしに日毎目白くる

雪浅間雑木に透けし古墳かな

寒月を孫と掬すくえり露天風呂

裂く気合鏡開きの豆剣士

孕^{はら}み猫胎教中か慎ましい

小山田の早苗かすめて舞う螢

紫陽花の彩とりどりに梅雨最中

霧島に神々しのぶ余寒かな

水蓮の左右に動く夏の風

秋立や味噌と生姜で酌いらず

アカシヤの夜目にも白く月上る

通院の足にぶらせる寒の入り

繭玉の触れあう音やどんど焼き

春立つや小川に沿いて猫柳

輪作の場所たしかめて薯植える

ナイターの帰り見上る丸い月

コスモスの野仏囲むごと咲きぬ

目印をつけし山芋すでに掘られ

月なくて供物さびしき十三夜

田水見に出でて螢も見ておれり

噴煙は今日は真上ぞ麦を刈る

雷去りて空に鮮やか虹の橋

病棟の灯^{あかり}も消えて長き夜

諸掘りの釣瓶落しに急かされる

風呂吹きや師走の寒さ吹とばし

通院の小春日和や経過よし

病棟の窓より梅に深呼吸

摘草をながめるように浅間晴れ

冷込に一枚増やし朝の散歩

雷去りて若葉青葉のかがやけり

春浅し同行二人に小雪舞う

田水見て戻る小川に蛭とぶ

浅間嶺は初冠雪や稲架はぜを組む

どの家も柚子の香りや冬至風呂

寒さなど吹きとばしてる八十路かな

暖冬のままにていつしか弥生なり

ぼた餅に祖母をしのぶや彼岸入り

選挙戦すんで静かや桜狩り

浅間嶺を水に写して田植する

新緑や谷のせせらぎ雉の声

梅雨晴れのひと時妻と草ひきぬ

四万川の鰍かじかの声に目を醒まし

豊年のきざし初雪大降りに

春雷の激しくきたり麦ゆらく

五月晴れ開眼迎う摩崖佛

甘樂

新緑の八十八夜雜貨市

岩つばめ華嚴の滝を右左

雪解けの水をたたえて八木沢湖

男体の山肌染めてつつじ咲き

茅の穂がプールに映えて夏も去り

昼は蝉夜は虫の音白露かな

黄金の波両側にあり散歩道

初明り仁治の文字を映しけり

富岡市

初夢は一富士^{ねが}希い床に入り

芹摘みて夕餉にそえる旬の味

旅のびて帰れば葉桜我迎う

山の街雑貨の市で夏に入り

梅雨間合い湯釜に向かう人の列

眼鏡橋吹きくる風や夏の月

巴^{うずまがわ}波川土蔵の影や鯉の群

栃木市

葉鶏頭^{めおと}夫婦の蝶のむつみあい

湯上りの浴衣肌寒む白露かな

秋空を映す岸边に鴨の列

大洞に空の青さや紅葉映ゆ

赤城

立春の空晴わたり棟上る

啓蟄の余寒に蚯蚓あわてけり

雉ばとの声春をよぶ彼岸入

風鈴に今年の音色梅雨明る

赤とんぼ信濃鎌倉八角塔

別所